

## 北海道東北部の飼料作物

# —牧野を有する主畜・酪農経営のために—

1 牧野を計画的に更新し優良草地としよ  
う  
重ねていうが、広大な牧野を持ちながら  
永年に亘る掠奪的な採草・放牧によつて反  
当乾草収量四〇～五〇貫の収穫、而も草質  
そのものも極めて不良とあつては、如何に  
であろう。牧草と根菜は何れも冷涼な氣  
候、風土に適し、而も家畜の飼料として、  
その生産量、栄養価共に極めて優れた作物  
である。酪農を営むものはこのことを深く  
再認し、本年こそは真剣に且つ計画的にこ  
れ等の増産を図りたいものである。

北海道東北部地帯は広大な土地面積に恵まれてはいるが、気候は寒冷で作物の生育期間は短かく、土壤も又酸性火山灰地、重粘土地等の不良土壤地帯が多く、普通の穀農業では經營が不安定であるため、自然に豊富な牧野を利用する酪農經營が発達し、北海道が酪農王国とよばれる一翼を荷つてゐるが、これ等の地帯の飼料作物の栽培は案外に粗放且つ低調で、天然草地か、牧草地から極めて低い飼料生産を、何とか面積の広さで補いをつけてゐるのが実態である。而も半歳に亘る長い冬期間の貯蔵飼料としては、野乾草とデントコーンのみに依存し、連年の冷害による不作のため常に冬期間の飼料不足を来し、冬との減産や冬期間の家畜の疾病多発の原因となつてゐる。昨年は近來にない冷害のため、二、三尺にも伸びないデントコーンをかえ、今更の様に飼料確保の対策が根本的に必要なことを痛感せしめられている。

この対策としては、既に旧くから唱導されて來たことであるが、適地適作に基づく計画的な飼料生産態勢の樹立以外には方法がないのである。即ち第一は優良牧草の造成であり

区		分	
		収量	反当
モシリ混合 (年更新二回刈) 赤クロベー、チ	1000貫	粗質 石炭 粉(ton)	収量(貫)
モシリ混合 (年更新二回刈) 青刈デント コーン	100貫	白質 石炭 粉(g)	反当り(貫)
七俵	100貫		
八 〇元	二 〇圓	モ 至00	
	六 〇〇元	100000	
	〇元		

この際に特に、牧草類が粗飼料といわれながら、酪農生産の基礎である蛋白源に富み、且又家畜の健康維持に欠くことの出来ないビタミン、ホルモンの給源を他の飼料第一表 草類、青刈デンントコーン及び燕麦の持つ栄養生産性

北海道農業試験場で行った荒廃牧草地の更新に関する試験成績を見ると、追肥のみでも草の生産量は倍以上となり、耕耘、施肥、追播の完全更新を行つた場合は、四・三倍の生産を挙げ、草の栄養分に於ても、石灰分は倍以上、ビタミン源のカロチノン含量は約二倍となつてゐる。自己の資本、労力に限度があるとしても、一部は追肥により、一部は完全更新による等計画的に実施し數年後には全牧草地を更新し得る様、そして常に量質共に最高の牧草地を維持し得る様にしたいものである。

大面積を擁していくても、非生産的であり、経営的に不安定は免れ得ない。牧野の更新、優良牧草地の造成には、耕起、整地、施肥は勿論、排水、酸度矯正等一貫した作業を必要とし、相当な労力、資本及び日時を要するが、完成した時には従前の数倍の生産が期待出来るなどを考え、今に全面的に新規造成、更新を実行されることが望ましい。

## 第二表 寒冷地帯に於ける牧草混播例

利用種別	混播方法(反当播種量)(封度)	備考
A採草用	(1) ルーサン1.0, 赤クロバー1.5 オーチャード2.0, プロームグラス2.0	相当肥沃な乾燥地 4~5年利用
	(2) 赤クロバー2.0, メドウフェスク1.5 チモシー1.5, ラデノクロバー0.5	比較的温潤な良好地 4~5年利用
	(3) アルサイククロバー1.0, メドウフェスク3.0, チモシー1.0, ラデノクロバー-0.5	温潤地 4~5年利用
	(4) アルサイククロバー1.0, ラデノクロバー-0.5, リードカナリーグラス1.0, ケンタッキー31フェスク2.0	温潤不良地
	(5) 赤クロバー2.0, イタリアンライグラス1.5, チモシー3.0, オーチャード1.0	排水良好地 1~2年利用
	(1) ルーサン2.0, ラデノクロバー-0.5 スマーズプロームグラス2.0	乾燥良好地
	(2) 赤クロバー1.0, ラデノクロバー-0.5 オーチャードグラス1.5	普通地
	(3) ラデノクロバー1.0, メドウフェスク1.0, ペレニアルライグラス2.0	やや温潤地
	(4) ラデノクロバー1.0, オーチャード1.5 ペレニアルライグラス2.0	植壤土
	(5) ラデノクロバー0.5, アルサイククロバー1.0, メドウフェスク1.0, ペレニアルライグラス2.0	温潤地
C採草放牧兼用	(1) 赤クロバー1.0, アルサイククロバー0.5, チモシー1.0, メドウフェスク2.0	温潤地
	(2) ルーサン2.0, 赤クロバー1.0, ラデノクロバー0.5, チモシー1.0, プロームグラス2.0	乾燥良好地

(イ) 牧草混播の必要性  
さてこれら等牧草地の造成更新に当つて、牧草類の播種は、この道東北部では雪どき直後に行うのが理想的であるが、準備その他で已むを得ない時は七月末までには播種を終りたい。さてこの際、特に要望されることは牧草の混播である。少くとも二種以上五・六種類、而も必ずまめ科牧草といわば牧草を混播することをすすめたい。

2  
寒冷地の安全多収作物である飼料用根菜類の増産を図ろう

前述の牧草地の造成は本春早速実行するとしても、実戦地の利用出来るのは明春以降である。そこで今年の飼料確保の対策としては、とりあえず現在の牧草地への追肥によって増収を期待することと、同時に一年生の飼料作物について遺憾のない作付計画を樹てなければならない。

一年生の飼料作物としては、七月刈取れる青刈燕麦（青刈エンドウ又はコンモンベーツチ混播）、七月下旬から八月中旬に収穫する

作物よりも多く持つてゐることを認識していただきたい。今その草の価値を知るために試験成績を掲げ参考に供しよう。第一表は牧草とデントコーンと燕麦について、夫々が持つて栄養生産性を比較したものである。即ち赤クロロベーチモシーリー混合の場合は、デントコーンに比し蛋白質で約二・五倍、カルボンで二倍、石灰分では十倍の栄養生産性がある。しかし、この結果は必ずしも北海道に適する牧草は赤クロロベーチモシーリーのみではなく、更に能力の高い優良牧草として、ルーサン、ラデノクロロベーチモシーリー、ペニーユアルライグラス、ケンタッキーフェスク等が利用され始めている。今適地適作の見地から考えられるこれら等の牧草の混播組合せを第二表に紹介しよう。